

教職員の資質向上を図り、魅力ある学校をつくるための 教頭の役割

—若年教師の資質向上を図るための工夫—

長崎県長崎市教頭会 長崎県立仁田佐古小学校 播 本 文 貴

1 主題設定の理由

本県では「第三期長崎県教育振興基本計画」において「子供の学びを支える魅力ある学校づくりの推進」が基本的方向性の一つに示され、そのための「教職員の資質の向上」が喫緊の課題となっている。

現在の大量退職・大量採用の流れの中、職員の構成年齢の二極化が進行し、特に、「採用5年未満の若年教師」（以下、若年教師）は採用倍率の低下も相まって、その資質・能力には個人差が大きく、OJTの重要性が顕著になってきている。

学校現場では、教職員としての専門性を身に付けさせると同時に、社会人としての礼儀等についても指導しているという話もよく聞く。

これらの問題に、教頭として、若年教師とどのように関わり、どのような取組を推進できるか考え実践していくことが、「魅力ある学校づくり」を具現化していくことになるという共通理解を図り、本主題を設定した。

2 研究のねらい

今後ますます「若年教師」の育成の必要性が高まる中、その資質・能力の向上に積極的に取り組むことは、学校組織の活性化及び職員集団の醸成につながると考える。

教頭として職員を指導し、学校組織を運営していく中で、どのような取組が実効性のある「若年教師育成」の方策となり得るかを考察していく。

3 研究の経過

本年度は研究の初年度に当たり、第12期全国統一主題「未来を生きる力を育む魅力ある学校づくり」を踏まえた取組を「若年教師育成」という視点で実践していく。今後は年度ごとに次のような取組を計画している。

(1) 令和2年度

ア 主題に基づく取組内容の検討

イ 各学校における若年教師の悩みや苦労等について、具体的事例の収集

ウ 若年教師育成の実践

(2) 令和3～4年度

ア 実践した取組の分析と改善

イ 実践による成果と課題

4 研究の概要

長崎市教頭会では、若年教師が抱える悩みや課題、問題点について調査を行い、実態把握に努めた。

把握した事柄を大まかに整理したものを次に示す。

〈教科指導について〉

- ・教材研究の時間の確保
- ・児童の興味関心や主体性の高め方
- ・個に応じた指導の在り方
- ・外国語科や道徳科の評価

〈学級経営について〉

- ・児童理解
- ・過度にSNSやメディアを利用している児童への指導の在り方
- ・特別な配慮を要する児童への関わり方
- ・トラブル対応への不安
- ・認め合う風土づくり

〈保護者対応について〉

- ・連絡が取りづらい保護者との対応
- ・平日以外の教育相談や児童対応
- ・保護者同士のトラブルに係る相談
- ・保護者への働きかけの仕方

そこで、三つの専門部に分かれ、研究と実践を進めた。

(1) 教科指導

＜実態＞

各学校で一番多く聞かれた悩みは教材研究の時間の確保であった。自身の授業力や教材研究不足により、同学年の学級との差を痛感したり、児童の学習の定着が図れないという悩みが生じたりしていた。また、児童の主体

的な活動の確保や興味関心を高める授業づくり、個に応じた対応にも苦慮していることが各学校の若年教師に共通する悩みであった。

<教頭の関わり>

- ① 校内研修を活用して、指導の場を設けた。同学年等の協力を得ながら師範授業を実施し、授業を見る視点の指導や児童への指示・支援の在り方の解説を行った。
- ② 教材研究の仕方や板書計画、机間指導の仕方など、「できて当たり前」と考えず細やかに伝え、実践につなげた。その他、他校の授業参観の機会には授業を見る視点だけでなく、教室環境や掲示物など参観する視点を明確に伝え、研修の質の向上を目指した。

- ③ 児童の記録を残すカルテシートの活用など評価の仕方も具体的に伝えた。

このような取組を通して、若年教師自身が自己の実践力に自信がもてたり、若年教師同士で情報交換を行ったりして成果が表れる実践となった。

(2) 学級経営

<実態>

学級経営では、多くの若年教師が個別の支援・指導について、悩みを抱えていた。ソーシャルスキルが学齢相応に身に付いておらず、トラブルになることやトラブルがSNSを通して起こり、対応が難しくなるなどの課題も各学校に共通している。

また、家庭教育力の低下に伴う児童の基本的な生活習慣の問題から、学級がまとまらない状況になっていることも少なくなかった。

<教頭の関わり>

- ① 学校内外の人的資源を活用し、学級経営に優れた教員の実践を伝える場面を設けた。
- ② 同学年や若年教師教員同士の情報交換の場を設定し、コーディネートを継続的にしながら、それぞれの悩みに対応していくことで、学級経営に自信をもって取り組めるように働きかけた。

これらの取組の結果、精神的なゆとりが生まれ、児童との関係づくりが好転したり、児童のやる気あふれる姿に励まされたりして、好循環が生まれた事例もあった。

(3) 保護者対応

<実態>

保護者対応の共通課題としては「連絡・連携を取りたい家庭に限って連絡が取れない」という悩みが多く挙げられた。児童の様子からネグレクトを疑う事例もあり、若年教師としてはどのように対応してよいか不安ばかりが募るという状況もあった。

また、保護者が年上で、伝えるべきことをどのように伝えてよいか迷ったり、トラブルについて何を伝え、何を守秘するか悩んだりすることもあった。

<教頭の関わり>

- ① 保護者とのやり取りに係わる報告・連絡・相談がしやすい体制をつくり、大きな事案は学校全体で対応することで、若年教師に安心感を与えるとともに、具体的な対応について直接指導することができ、成果が得られた。
- ② 通知表を受け取ってもらえないという事案では、保護者への説明について、模擬説明会を行い、若年教師が不安なまま当日を迎えることがないようにした事例もあった。このような取組を通じて、教頭の役割として保護者との橋渡しや家庭教育への指導・助言を担う必要性もあることを確認した。

5 研究の成果と課題

今回、若年教師の現状を集約したことで、その結果を共有し、必要に応じて自校の若年教師に返すことができた。若年教師は、同じような悩みや問題を抱えている同世代の仲間がいることを実感したであろうし、教頭は、自校で起こっている事案が、特有の問題ではないことを認識することができた。また、市教頭会において情報を共有するなど、横の連携を大切にすることで自校の若年教師への指導に役立てることができた。

今後は、教材の共有化や情報交換の時間を生み出せるような働きやすい職場づくりを目指し、時間を確保するための時程や学校行事等の精選にも目を向けていきたい。同時に、問題点の指摘のみに終始せず、若年教師の資質能力の伸び・高まりを積極的に評価し、その変容を見取る手立てについて研究を進める必要がある。